

平成30年度「障害学生支援専門テーマ別セミナー」

発達障害学生の就労を実現するための支援の在り方
～意思表示支援とセルフアドボカシーを中心に～

分科会 1 「意思表示支援とセルフアドボカシー」 修学支援における意思表示支援とは

富山大学保健管理センター 准教授

富山大学教育・学生支援機構 学生支援センター副センター長

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室長

西村優紀美

学生が意思表示をする機会

- 支援に関する同意・承諾（agreement）
- 合理的配慮に関する内容と方法
- 情報開示の内容及び範囲
- 授業の選択
- サークル・アルバイト・プライベート
- ゼミ選択
- 進路選択（進学・就職）
- 就職活動（就業地・企業分析・応募企業・就業形態）

合理的配慮の内容の決定の手順

文部科学省HP「障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告会（第二次まとめ）」より

1. 障害学生からの申し出

- 障害学生からの意思の表明
- 申し出がない場合、大学等から当該学生に対して適切と思われる配慮を提案するために建設的対話を働きかける
- 必要な情報や自己選択・決定の機会を提供する
- 根拠資料の提出
 - 資料に有無にかかわらず合理的配慮の提供について検討することが重要

2. 障害学生と大学等による建設的対話

3. 内容決定の際の留意事項

4. 決定された内容のモニタリング

「意思決定を支援する」という考え方

菅富美枝「自己決定を支援する法制度 支援者を支援する法制度

-イギリス2005年意思決定能力法からの示唆」より

- 意思決定能力（decision-making）とは

- ① 自分の置かれた状況を客観的に認識して、意思決定を行う必要性を理解し
- ② そうした状況に関連する情報を理解、保持、比較、活用して、
- ③ 何をしたいか、どうすべきかについて自分の意思を決めること

- 結果としての「決定」ではなく、「決定するという行為」そのものが着目されている点が特徴
- 意思決定過程（decision-making process）に焦点が当てられることによって、意思決定を他者の支援を借りながら行う「支援された意思決定（assisted decision-making）の概念が取り入れることが可能

意思表示支援に関する留意点

- 学生本人に困り感がなく、教職員が配慮の必要性を感じている場合、支援者側が学生の意思決定や意思表示を性急に求め、本人の自覚や配慮に関する意思を軽視してしまうことのないよう支援者は自分の役割を自覚する必要がある。
- 発達障害学生は自身の障害特性の理解が難しい場合があり、さらには、適切に意思を表明する機会が与えられてきた学生は、今のところきわめて少ない。このことに留意し、まずは修学支援の中で、支援者と共に、「適切にアドボケイトされる経験」と「アドボカシースキルを獲得する経験」を重ねていく必要がある。

意思表示とは・・・

- 意思
- 自分の考えや思いのこと
- 意思は「考え」という言葉で置き換えられる

- 「自分の考え」として整理し、まとめ上げるプロセスが重要で、支援者はその機会を提供する必要がある。

意思表示する場

1. 小集団活動・コミュニケーション・ワーク

- 考えを選ぶ
- 考えをまとめる
- 考えを伝える
- 否定されない・承認される・称賛される

2. 修学支援における定期面談

- 事実の確認
- 選択肢からの自己選択・自己決定
- 考えを出し合う・合意する

1. 小集団・コミュニケーション・ワーク

自分の考えや意見を尊重して聞いてもらう体験をすると共に、他者の考えに耳を傾ける体験を通して、さまざまな考えや解釈があることを知り、考え方の多様性を受け入れる態度を養うことができる機会になることを期待している。

- 考えや考え方に対する評価をしない。
- 「言わない」「言えない」「考え中」もOK！
- 真似することもOK！
- 他者に触発されて、考えを変えることもOK！
- 考えを変えず、貫き通すこともOK！



事例

2. 修学支援における定期面談

- 事実の確認
- 選択肢からの自己選択・自己決定
- 考えを出し合う・合意する
- 結果の振り返り・再検討



□ 個別面談

- 学生の困りごとを聞き取り、どうすれば修学上の問題が解消するかを考え学生の意向を聞き、対処法を暫定的に決め提案する。
 - ・履修の立て方、出席確認、課題提出の確認
 - ・スケジュール確認（手帳の使い方）
 - ・優先順位付けと思考の整理
 - ・生活（衣食住・アルバイト・生活リズム）
 - ・趣味・気になるテーマ（政治,ニュース,こだわり等）
 - ・コミュニケーション（教員・クラスメート）

事例

学生の「意思」を表明することをサポート

- 発達障害のある学生の中には、自分を含めた周囲の状況や困りごとを認識していなかったり、うまく表現できなかったりする人がいる。
- 自分の思いに気づく、考えとしてまとめる、他者に伝えるために表現する等の機会を、さまざまな形で提供していく必要がある。
- 学生が自分自身の最善の利益につながる自己決定ができるように、対話のなかで「状況と困りごとの関連性」を把握するために必要な情報を、一緒に整理していくことが重要である。
- 学生が自分にとってよりよい選択、適切な判断ができるよう、コーディネーターは慎重、かつ粘り強く関わりつつつけていく心構えが必要である。